

は、「あいさつの仕方だけでもいいから何かを得て帰ってもらいたい」と強調。このでっち奉公についても「生徒の将来のためにも役に立つので、機会があればどんどん来てほしい」と熱いラブコールを送っていた。この日、ゲーム機の景品の袋詰めをした國分慶太郎君(四)は、「入れ方や入る順番で見栄えが変わってしまうので難しい」と気を使っている。黙々と作業を行っていた。



▲「学校以外の勉強も大切」と話す中垣内さん⑥

将来に向けての
選択肢が増えると思う

介護老人保健施設のコミュニケーションホーム白石には現在百人の高齢者が入居している。この施設では二十人の生徒が働いた。仕事は蛍光管の交換作業のほか、車いすからごみ箱まで部屋の中すべての清掃だ。施設の介護主任で、生徒の指導に当たった境田哲哉さん(三)は、「学校だけではな

く、実際の現場で苦勞を体験することは良いこと。生徒にとっても自分の将来を考える上で、選択肢が増えると思う」と話してくれた。この日、部屋の掃除をしていた大久保りさん(四)は、「仕事は結構難しい。思っていたより大変だった」とふき掃除に汗を

流していた。

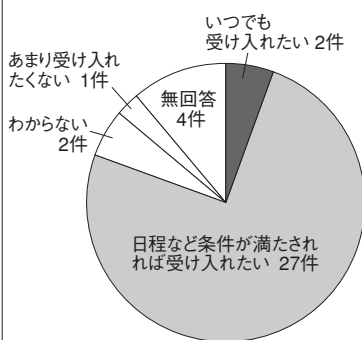


▲生徒の丁寧な仕事ぶりに感心していた境田さん⑥

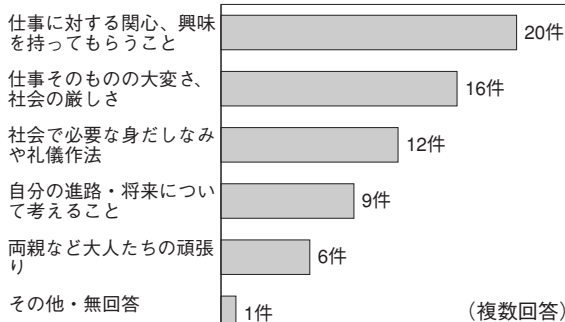
生徒を受け入れた事業所へのアンケート調査結果(抜粋)

【回答は36件】

■今後でっち奉公を受け入れたいと思いますか



■子供たちに何を(感じ取って)ほしいですか



【自由記載欄から】

- この体験は仕事や人とのふれあいを考える良い機会になったと思う(同様意見4件)
- 事業が継続され、こういう機会が増えることを望みます(同様意見3件)
- 地域や学校の恒例行事になるのなら協力は惜しみません
- 「でっち奉公」という用語は今の時勢に合わないのではないかと(同様意見2件)…ほか

編集後記

今回のでっち奉公に参加した事業所は区役所も含めて区内60カ所に及んだ。受け入れに当たり不安を感じていた事業者もあったと思うが、実際にふたを開けてみると、生徒の真剣な姿に感心された方も多いのではないだろうか。しかし、真剣だったのは事業者も同じである。子供たちに何を分かってほしいか、何を感ずてほしいか、あれこれ考えていただいたに違いない。子供たちに、ひいては地域のために何が出来るか、という熱い思いがひしひしと伝わってきた。これが縁で固定客が増えた店もあるという。そして、子供たちが地域に目を向け始める。このでっち奉公は、地域活性のヒントを与えているかもしれない。

この特集の撮影・取材をしたのは私たちです

今回の「白石でっち奉公」の特集記事は、区役所にでっち奉公に来た中学2年生の奥山未希さん、富岡円香さん、林亜美さんの3人が写真撮影と取材(インタビュー)に挑戦。これを、後日区役所広聴係が編集したものです。半日余りの間に3カ所の取材活動という強行軍でしたが、とても張り切って取り組んでいただきました。



▲林さん(インタビューと写真④・⑥を撮影)



▲富岡さん(インタビューと写真①・⑤を撮影)



▲奥山さん(インタビューと写真②・③を撮影)

【一人ひと言】

- 奥山さん…「教えてもらった礼儀を忘れず、将来に向かって頑張りたい」
- 富岡さん…「物事にはやりがいをもって一生懸命取り組んでいきたい」
- 林さん…「取材でいろんな人と話せたことを今後に生かしたい」